
魔王国を建国しようガイド

分福茶釜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王国を建国しようガイド

【Nコード】

N6521X

【作者名】

分福茶釜

【あらすじ】

『魔王国を建国しよう』のキャラクターや世界観の補足的なものです。

登場キャラのあんなことやこんなことまで……………気になる所はこれを見れば丸わかり……………でもないか……………

魔王様

魔王 まおう

性別 女

年齢 17歳

身長 166?

体重 49?

所持品 斧 貨幣 制服

やや細めな体つきで黒い制服に身を包んだ、長い黒髪と漆黒の眼が特徴の少女。

とある組織によって異世界に転生させられた黒井真央くろいまおという日本人であるが、転生後記憶を消されたためその事実を知らない。また、魔王と勘違いされたため、自分を一応は魔王であると思っている。

転生後初めて知り合ったのが魔物マクロであったため、その影響からか価値観や思想がかなり人間離れしている。現在では、独自に調べた魔王のイメージも加わり、もはや思想の面でいえば魔物でも手に負えない存在となった。

基本自ら争いを好んで行うわけではなく、温厚な性格の持ち主だが、手を出してきた者に対しては容赦なく殺害するなどといった冷酷さも持ち合わせている。

臣下であるクオを特に気に入っているため良くちょっかいを出し、からかっている。

クロ

クロ

性別 男

年齢 不明

体高 70?ぐらい (本来の大きさは、5メートル程)

体重 不明

所持品 特になし

漆黒の毛を持つ獣。見た目は犬と見分けがつかない。

魔王の最初の臣下。詳しいところは不明だが何かの呪いによって人間も丸ごと一飲みに来たそうな巨体から大型の野良犬サイズまで小さくなってしまった。魔王の思想に大きな影響を与え、彼女のしゃべり方が高圧的になった原因の一つでもある。

最近魔王である彼女にいいように弄ばれ、もはや彼女に出会ったころの凶悪そうな獣というイメージは無い……………

魔王である(と思っっている)彼女にも特に遠慮することなく物をズバズバと言ったり、悪態をついたりするが、基本彼女のことを魔物や人間から守っている良い臣下であると言えよう。

ガイコツ

レイフォンド・アロン・フロワルド

性別 男

年齢 不明

身長 23?くらい(体がついてた時は180?)

体重 不明(体がついていたときは13kg)

所持品 特になし(というよりも奪われたの方が正しい)

高位の魔物で悪魔貴族のうちの死神貴族であると自負している。言葉づかいは貴族を思わせる丁寧なものだが性格は残忍で残酷、人間を下等な生物と考えている悪魔の鏡の様な男。自らの手下とともに魔王を襲うが、首をはねられた挙句、金属の屑で作られた足を無理やり魔王に取り付けられたため頭蓋骨に蜘蛛の様な金属の脚が生える奇妙な姿になってしまった。魔王からはガイコツと呼ばれ、またクロからは骨と呼ばれているため全く名前では呼ばれたことがない。死神と名乗るだけあって人の命を奪う能力を持つが本人はそれを気に入っておらず、より物理的なグロテスクな殺し方を好む。

魔王である彼女に対しては謙虚だが協力的でなかったり、時折魔王の元から姿を消すこともありクロから警戒されている。クロとはそりが合わず良くもめている。

エルフィーナ

レイフォード・エルフィーナ

性別 女

年齢 18歳

身長 167?

体重 52?

所持品 短剣 貨幣 調味料 フード

簡易的な鎧に身を包んでいるエルフ。人間達の村では正体を隠すためにフードを身にまといている。エルフ族としての誇りが高く、過去に人間のせいで両親を失ったことから人間に対してあまりいい感情を持ってはいない。しかしそれ以上にエルフの国を滅ぼした魔物を統べていたという魔王を憎んでおりいつか仇を打つことを誓っている。

魔王である彼女とは初め対立していたが、自分の勘違いによるものだと思いき後に謝罪している。このような素直な一面を持っているが、相手の言葉を鵜呑みにしたり勘違いしたりする傾向があって、感情の起伏も大きい。

スライム

スライム・水玉

性別 不明（そもそも雌雄という概念が存在しているのかも不明）
年齢 不明

体長 湿気によって変化するが基本は直径12?程の円または楕円形。

体重 含む湿気により変化する

所持品 特になし

主にスライムは川辺や池の近くなど湿気の多い所に生息するがなぜか乾燥している崖の下にいて死にかけていたところを魔王によって助けられた。このことから魔王を慕っているようであり、ゴブリン達から魔王を救ったり、魔王の命令を忠実に守る。

体は伸縮自在で、体の中に水分をためることが出来るため魔王達の飲み水を運搬する係を担っていると見えよう。魔王からは水玉、それ以外からはスライムと呼ばれており言葉を話さないが言葉を理解することはできる。

人族

人族

身体的能力はそれほど優れているわけではないが、高い技術力を持ち多種多様な文化を形成している。人語を話し、人文字を使用。集団生活を基本的に好む。

人族は、魔族やエルフ族に代表される異種族に対して嫌悪感を抱く傾向が強く、それらの種との対立の溝は深い。（蔑称として、エルフ族⇨耳長族　ドワーフ族⇨小人族などがある。）
特殊な人族として、神官や魔法使いは常人には理解できない特殊な力を持つ者として時に権力者として崇められたり、魔物の使いとして虐げられたりされる。

地域や国によってさまざまな特色があるため断言できないが基本的に、人族というのは強固な集団生活を形成しているため理解できない異物的存在を上手くその集団社会に溶け込ませることに時間がかかる。

魔族

魔族

基本的に単独で行動をするものが多く、群れるものは特定の種に限られる。

他の種族より身体能力に優れ、また特殊な魔力をもつものが多いため他の種族を襲う傾向がある。食事を必要としないもの、完全に生命を絶たなければ瀕死状態から完全に回復することが出来る種も存在し、その体のつくりは他の種族に比べ謎が多い。

強大な力を持つ者に本能的に服属し、魔族を束ねるものは、魔王、魔神、天魔、邪神、邪王などさまざまな名でよばれる。

厳密的に言えば、魔族というものは、高位の魔物のことを差し、魔族特有の言葉、文字のほかにも人語、人文字を解することができる。意思疎通が可能であり人族やエルフ族などと会話も可能だが、完全に他種族を見下しており他種族は魔族たちにとって家畜程度の認識である。

また、魔物の中には完全に言葉を持たず意思疎通もできぬものも存在しこちらは魔獣と呼ばれる。魔族という種のくくりわけになっているものの、どちらかと言えば獣に近い。

魔族、魔獣そしてこの中間にあたる種などすべてを合わせて魔物と呼ばれる。

人族やエルフ族などの様に一元的な種族ではなく、魔族というのは多様な種の総括的な呼び方であり、人族、エルフ族の様なくくりで表すとするならばゴブリン族、トル族などと呼ぶ方が適切だ。しかし、人族の間では皆同じものとしてとらえられがちである。

悪魔貴族や、王家など階級制度も存在しているが人族の様に絶対的なものではなく力があるものが絶対的という考え方が主流。現に王家は過去の勇者の進撃と魔物の反乱などによって滅亡している。

昔話魔王

語り手さん「むか〜し、むかしのことでした。あるところに、お爺さんとお婆さんがおりました。お爺さんは村へ買出しに、お婆さんは池に洗濯をしに行きました。」

ほわわわわん

お爺さん「今日は何かいいい魚、入ってないかね？」

お爺さんは村の漁師に聞きました。 （注：語り手さんです）

漁師「おお！！今日は魚じゃなくて魔王が入ってるよ。」

お爺さん「何じゃと!?!」

お爺さんはびっくり仰天。早速漁師さんに魔王を見せてもらうことにしたので。

漁師さんに案内されるままお爺さんは奥の部屋へと案内されました。すると、そこには首から名札を下げた魔王様がいらっしやっただので。

魔王「諭吉を出せ」

お爺さん「1時間それで相手をしてくれるのかのう?」

漁師「なんか卑猥になってるよ、じいさん」

なにはともあれ、お爺さんは魔王を買うつと喜び勇んでお家に帰りま

した。

ちょうどそのころお婆さんは、池で洗濯をしていました。しかしその途中大事な洗濯機を落としてしまったのです。

お婆さん「おやまあ……困ったねえ。あれがないと洗濯もできやしない」

お婆さんが困って池を眺めていると、突然池が光だし、何と美しい女エルフが池から浮き上がってきました。

エルフィーナ「お婆さん。あなたが落としたのは、この全自動式洗濯機ですか？それともこの洗濯板ですか？」

お婆さん「私が落としたのは全自動洗濯機だよ。さっさと返しておくれよ。」

それを聞くと女エルフは小さく微笑みました。

エルフィーナ「あなたは正直者ですね。そこであなたには、この黒い犬を差し上げます!!」

クロ「わんわんわんわん!!」

女エルフは黒い犬をお婆さんに預けるとまた沈んで行ってしまいました。

お婆さん「洗濯機返しておくれえ！！まだローンが3年も残ってるんだよおお！！」

お婆さんが黒い犬を連れて家に帰るとちょうどお爺さんも帰ってくるどころでした。

お爺さん「お前そんな犬拾ってきてどうしたんじゃ？」

お婆さん「そういうあんたこそ、若い女連れてきてどういっつもりだい！？」

……なにはともあれ魔王はお爺さんとお婆さんの娘として暮らすことになりました。

しばらく、平和に暮らしていた魔王達でしたが、不幸の知らせがお婆さんの携帯のメールに届きました。

『このメールは不幸の手紙です。3日以内にこのメールを5人以上に送らないとあなたは不幸になります。ちなみにこのメールの親は勇者様です。文句ならそいつに言え。』

このメールが来てからというものお婆さんは食事ものを通らず、とうとう寝込んでしまったのです。魔王はお婆さんを助けるため、勇者を倒すたびに出ることにしました。

まず魔王はお爺さんから冒険のための資金をもらいました。そしてお婆さんを起こすと、きび団子を作らせました。

魔王「お爺さん、お婆さん。今までお世話になりました。」

お爺さん「お前だけ、不幸から逃れるつもりじゃな！！待て待たんか！！」

魔王は走って家を出て一度も家を振り返らずに森の奥までやってきました。

しかし魔王は後ろに何やら気配を感じました。

魔王「さては、あの爺……まだついてくるのか？」

クロ「わんわんわん」

魔王「なんだ？仲間になりたいとでも言うのか？」

クロ「わんわんわん！！」

魔王は黒い犬に、持っていた首輪を付けると黒い犬を引きずるようにまた進みだしました。

しばらく行くと気味の悪いガイコツが現れました。

ガイコツ「魔王様魔王様、お腰に付けたきび団子一つ私に下さいな」

魔王は1つきび団子をとりだすと、ガイコツにあげました。しかし、きび団子はガイコツの口をすりぬけそのまま地面にすりと落ちました。そしてそれを黒い犬が食べてしまったのです。しかしそんなことは関係ありません。魔王はガイコツを子分にするとまた進みだしました。

さてしばらくするとまた新しいキャラクターが出てきました。

??? 「魔王様魔王様、お腰に付けたきび団子一つ私に下さいな」
さてこのキャラクター、なぜ名前がないのでしょうか。そう。賢い読者の皆さんならもうお分かりです。このキャラクターはまだ本編に出てきていないのです。つまり……………そういうことです。

魔王はそのキャラクターにもきび団子をあげました。
こうして、魔王は、犬、骨、?、を引き連れとうとう、勇者城にたどり着きました。

勇者「ようやく来たか。社会のゴミ共め。スーパースターの私に社会のゴミが勝てると思っているのか?」

勇者がそう言うのと周りの村人がキヤーキヤーと黄色い声を上げます。
一方魔王達には激しい罵声やブーイングの荒し。

魔王「だめだ……………勝てない……………。これが、勇者!」

クロ「わんわんわん!! (あきらめちゃだめだ!!)」

ありがちな、かつこでの動物の心情表現。

その黒い犬の心情表現で勇気が出た魔王は勇者に向かっていきます。

魔王「!!!!!!!!!!」

勇者「!!!!!!!!!!」

勇者と魔王がぶつかりあったとき辺りはまぶしい光で埋め尽くされました。

黒い犬達が目を開けるとそこにはもう何もありませんでした。まっさらな草原が広がるばかりです。ふと、ガイコツが口を開きました。

ガイコツ「魔王様は、自分を犠牲にして……この世界を救ったのです……」

クロ「ワンワンワン……（まーおーうー……）」

こうして、世界の平和は守られました。

「魔王国を建国しよう」とは、つまりこういう話なのです。わかりり？

終

昔話魔王（後書き）

このお話の登場人物、また登場する団体名はフィクションです。

竜宮魔王

「怒るな、スライム。あんな下らぬ話には出れなくて良かったのだぞ？」

何やらお怒りのスライムをなだめる彼女。なんでも、スライムとあるお話に出られなかったことをなだめている様子。

「なに？もう一度ちゃんとやってほしい……だと！？正気かー！」
スライムは素早く体を縦に振る。どうやら肯定の意を伝えたいらしい。

「……………仕方がないな……………これが最後だぞ？」
彼女は大きいため息をつく。

ざばあああつざばあああつ（波の音）
あるとき魔王様は魚類を食べたいと思われ、自前の釣り道具をお持ちになってリチュレの港にやってきたのでございます。

「……………」

ふと、魔王様が海岸沿いの砂浜に目を向けると何やら数人の人影が

……
気になった魔王様はその人ばかりへと近づいてゆかれました。

「ああん？てめー、ここがどこだかわかってんだろうなあ？ここあ俺達の縄張りだぞゴらあ！？」

「あまり舐めたまねをすると痛い目に会いますよ？」

魔王様が近づいて行かれますと、そこには真つ黒な犬っぽい子供とガイコツっぽい子供がスライムの様な亀をいじめておりました。

「ほう……随分と透明感のある亀だな。それにやわらかそうだ……」

魔王様はスライムっぽい亀が可愛いそうになったので、子供たちにスライムっぽい亀をいじめるのをやめるようにおっしゃいました。

「うるせえ！！この色気無し！！貧乳！！腐れ外道！！！！」

「亀なんてかばっちゃって……頭大丈夫ですかあ？」

子供というのは時に残酷なものである。しかし、魔王様は優しく御笑いになって子供達に口を開きます。そう、魔王様は菩薩の様なお方なのです。

「貴様ら、まさかただで済むと思っているわけではあるまい？」

ニコニコと笑いながら子供達にそうおっしゃる魔王様。

「ま、まさかあ……魔王様、これは役の設定でございましてえ、ほら村の悪ガキという……まさか我々が本気で言うわけないじゃない

ですかあ」

「そ……そうだ……！ほら台本にも、ちゃあんと書いてあるんだ！
！……！」

……と、とにかく、魔王様は子供たちを追い払うとスライムっぽい
亀を助けたのでございます。

「……なに？助けていただいたお礼に……竜宮城に連れて行って差
し上げる……だと？」

スライムっぽい亀は魔王様にそう伝えると魔王様をおぶって海の中
に潜りました。

しばらくスライムっぽい亀に背負われて泳いでいくと水底都市 r y
u g u u j y o u についたのでございます。

「魔王様、ようこそ竜宮へ。」

そこには、何とも美しいエルフの女性が出迎えておりました。

そう、r y u g u u j y o u の女王、エルフィーナ様でございます。

「あら？……ってあれ？おい……！魔王……！大丈夫か……！」

魔王様は肺呼吸でございます。スライムっぽい亀のように水中で長
く息が続くわけがありません。

「すぐに治療室に連れて行くんだ!!」

さて、魔王様が連れて行かれた場所はryugujyouの最先端の医療機関。

すぐに治療が行われます。

「今からオペを始める……」

今回の主治医はウェーブス・マック。ryugujyou最強の町医者です。

「……………汗!!」

「はい!!」

何とも難しい治療なのでしょう。マック氏から流れ落ちる汗をそばにいる看護師が拭き取ります。

「患者の上体を起こして!!」

「はい!!」

ぱん!!ぱん!!ぱん!!マック氏は強く魔王様の背中を叩きはじめました。

「痛い!!やめんか!!藪医者!!」

「おお!!患者の意識が戻った。」

「オペは成功です！！やりました！！」

魔王様はとうとう怒りだしてしまいました。仏の顔も三度まで。とうとう慈悲深き魔王様でも耐えられなくなったのでしょう。

「何という所だ……私は帰るぞ。」

さっさと帰ろうとする魔王様をエルフィーナ様は呼びとめました。

「お待ちください！！魔王様！！」

「……お前もか、エルフィー……」

「魔王様……お帰りになる前に今回のお詫びとして玉手箱をご用意させていただきました。それを魔王様に選んでいただきたいのです。」

「

「こちらが、大きな玉手箱。こちらは小さな玉手箱。さてどちらに致しますか？」

「どつでもよいが、そのしゃべり方はやめろ。奴にキャラがかぶってしまつ。」

「……どついつことだ？」

エルフィーナ様は魔王様に聞き返しますが、魔王様はそれを華麗にお無視になられて、玉手箱を選ばれました。

「小さい方だ。」

魔王様は本当にさつさと選ぶと、亀っばいスライムを捕まえて、本当にさつさと陸へと戻ってきました。

「……私の家がない??？」

何やら、魔王様がryugujyouに行く前と今では町の様子がずいぶんと違います。

ちよつどその時近くを若い男性が通りかかったので魔王様は彼に事情を聞きます。

「ここに魔王の家があったはずだが……どうしたのだ？」

「はぁ？アンタ頭大丈夫？ここに住んでた魔王つて500年前に勇者に退治されたっしょ、歴史の教科書見ねえわけ？」

「なに！？それは本当か！？別の魔王ではないのか？」

「あゝほんとほんと、確かそれよりも前に退治された魔王もいたみたいだけど、俺そこまで覚えてねーし！つかここに住んでた魔王よりも新しい魔王なんていねーだろ？」

そう言うと彼はその場を後にしてしまいました。

魔王様はただただ立ち尽くすばかり。

どれくらい経ったでしょうか。

魔王様は不意に玉手箱の存在を思い出します。

「これを開ければ何か分かるのか？」

魔王様はそういつと玉手箱を開けてしまいます。そう言えば特に開けてはいけないなんて言われなかった気がします。

ゆっくりと玉手箱を開くと一枚の紙が入っておりました。

『はずれ……ぞまーみる。』

魔王様のガラス細工の様な繊細なハートは音を立てて壊れましたとさ。

完

竜宮魔王（後書き）

ふにゃ〜としてぺろ〜作ったくっだらな話。
何で作っちゃったんだろ〜……アハ……あははは……
……はあ。

裏切魔王

「エルフの娘だ！！エルフの娘がいるぞ！！！」

人間達が、エルフィーナを捕まえるためにどんどんと迫ってくる。エルフィーナと一緒に人間達から逃げている彼女は大きいため息を吐いた。

「面倒な……………」

隣を走るエルフィーナにも聞こえないような声で、彼女は呟くと突然エルフィーナの足を払う。ただでさえ逃げ続けて体力のなかったエルフィーナはその不意打ちになすすべなく倒れた。

「なっ！！何をするんだ！！！」

抗議の声を上げようとエルフィーナは彼女の顔を見るがその冷たい瞳を見て体がぞつとした。

「なに……………簡単なことだ。貴様には奴らのおとりになってもらう。」

「な……………何を馬鹿なことを言ってるんだ！！！」

にたりと笑いながら恐ろしいことを言う彼女に信じられないと顔を青ざめるエルフィーナ。いつもの冗談にしては質が悪い。

「わ……………私たちは……………な、仲間では……………」

途中でエルフィーナの言葉は悲鳴へと変わる。魔王が倒れているエ

ルフィーナの足に斧を振り下ろしたからである。

「ふふん。私にとっての仲間とは私に利益をもたらすものもしくは私と利害が一致しているものだ。……相互に利益をもたらすものも行ってもよいな。つまり私にとってこのままお前と行動を共にする理由が見つからないのだよ。……私にとつてもはやお前は害悪なのだ。お前のせいで私まで巻き込まれたのだから。私に害悪をもたらすものはもはや仲間ではない。……なぜ利益にならない者に私が利益を恵んでやらねばならないのだ？」

あまりの痛みにエルフィーナはもはや答えることはできない。ただただ涙があふれてくるばかり。

「ふふふ……だがしかしエルフィーナ、やはりお前はまだ私の仲間だよ」

優しく微笑む魔王にエルフィーナは涙でかすんだ視界でとらえた。

「お前は、ここで私のために奴らの犠牲になつてくれるのだから。……そうだ、代わりにいいことを教えておこう。前にお前の言っていたエルフの国を滅ぼした魔王というのは……私のことだ。」

もはや怒りの感情すら湧いてこない。ただただ情けなくそして悲しい。

「ではな……エルフィーナ。貴様は良い仲間であつた」

魔王がそういつたときに追つての足音が聞こえてきた。

去って行く魔王に、エルフィーナは置いていかないと叫ぶ……と叫

びたかったがそれは声にならなかった。
信じたくなかった。彼女がエルフの国を滅ぼした魔王だなんて。そ
して、見放されるのも嫌だった。一人になりたくない。さみしい、
さみしい……

両親と離ればなれになった時と同じだ。ただ……今回死ぬのは自分
だと言うことが前と違う。ゆっくりとこの場を後にするずっと憎ん
でいた仇のはずの彼女に、気がつくと置いていかないで、一人にし
ないでとエルフィーナの心は叫び声を上げていた。

「！……！！」

がばり！！と勢いよく目覚めたエルフィーナ。
嫌な汗が首筋を伝う。

しばらくして、自分に毛布が掛けられていたことに気がつく。エル
フィーナが重い頭で周りの状況を確認しようとしていたとき、軽い
調子で声がかけられた。

「お目覚めですか？エルフィーナ氏」

「え……あ、ああ」

思いだした。そう言えば森を歩いていて、少し休んでいるうちにウ
トウトとして……気がつけば寝てしまっていたらしい。

ふと、この場にいない彼女のことが気になった。

「魔王は……どうした?……」

「魔王様は、獣と一緒に少しこの付近の様子を見に行っただけです。」

そうか……と小さく返すエルフィーナをじっと見てくるガイコツ。表情がないぶん何を考えているのかわからなくて怖い。

「……………ど、どうした?」

「いえ別に、あなたこそどうなさったのかと思ひましてね、」

ガイコツに言われ、ようやく自分が涙を流していることに気がついたエルフィーナ。慌てて涙を拭いても拭いても止まらない。

「あ……………あれ……………なんで」

「……………知りませんよ。何でもいいですが、魔王様が帰ってらっしゃる時までには泣き止んでくださいね……………」

ガイコツはそれだけ言うと、エルフィーナのそばで地図を広げてそのまま無言で今後の計画を立てているようであった。しばらくの間、エルフィーナのすすり泣く声だけが聞こえた。

太陽が西の空に沈み、エルフィーナ達がいた森も暗くなってくる。どこまで行っていたのか、くたくたになったクロの上に跨って、すました顔の魔王が帰ってきた。

「おい！！エルフの小娘！！お前のせいで、いらん苦勞をすることになったではないか！！どうしてくれる！！」

べつたりと地面に倒れながらエルフィーナに悪態をつくクロ。
エルフィーナは苦笑いをしながら謝罪の言葉を述べる。

「おお、そうだエルフィ。水玉と一緒に水を汲んできてくれ。この近くに川があるからスライムについていけば分かる。……決しておまえに料理をさせないようにしているわけではないぞ………だが、急がなくていい。ゆっくり帰ってくるんだ」

ぎこちない笑いを浮かべながらエルフィーナへと口を開く魔王に、少し話ができないだろうかと、ごによごによもじもじと聞くエルフィーナ。いつもと違うエルフィーナの様子に魔王は不思議そうな顔をする。

「なんだ？」

「おっと、魔王様、ワタシと獣は調理の準備をしていますので」

ちよつと休ませろ！と騒ぐクロを引つ張りながらガイコツは彼女達から離れたところへと歩いて行く。どこで調理をする気なのだろうか……

「ふむ、水玉。お前は先に川に行っている」

魔王はそばにいたスライムを川に行かせるともう一度エルフィーナに向かい直った。

「で、急に改まって話とはなんだ？」

「うっ……」

この場にいるのはエルフィーナと魔王だけ。話をするにはもってこないのだが……

「な、なんでもない！！」

エルフィーナは顔をツンとそむけるとこの場から足早に去ろうとするが、足払いをされてその場で盛大にこける。

「~~~~！！！！何すんだ！！！！」

「ぶっぶっぶっ……」ここまでその気にさせておいてそれはないだろ
「っ」

倒れたエルフィーナを逃がさんとばかりに、魔王はエルフィーナの上に馬乗りになる。

「さあ、言え！言わんか！………」

「や、やめるおおおおお………」

エルフィーナの叫び声が辺りに響いた。

裏切魔王（後書き）

魔王「……………ふわふわのオムライスが食べたい」

クロ「何？その目……………言っておくが俺は作りませんからね、」

偽装魔王

『間尾浮国を健康苦しよっ』

ここは、ローレシア大陸の北。魔王国。

まおうこく

異形の魔物達の住まう愛と平和の国。今日も魔王国はにぎやかな声があふれています。

「……………」

「オヤ？マヲウ様。どうなさいました？そんな疲れた顔をして」

額に手を当てて溜息を吐く彼女に金属的な脚のついた頭蓋骨が話しかける。

「ん……ガイコツか。一体何の用だ？……………」

「？ 何をおっしゃっているのですか？ 私はガイコシですよ。そろそろちゃんと名前と呼んでほしいですが……………」

「ガイコシ！？ 待て…………お、お前の名前は何だったか？」

「ワタクシの名前ですか？レリーフォント・アロー・アルファードでございますよ。覚える気になってくださいましたか！？」

「そ……そんな名前だったか？」

納得いかないのか首をひねる魔王。しかしもともとの名前を覚えていないので本人がそうなのだとさえ言えば納得せざる追えない。

「そ……そうだ、エルフィーなら何か分かるかもしれん……」

魔王はいつもと違うガイコツの様子に何かを感じたのか、エルフィーナの元へ急いだ。

「お？ マヲウ。どうしたんだ？ そんなに慌てて」

「おい！！エルフィーナ！！お前ガイコツの名前を覚えているか？」

「ガイコツの名前？……ああ、ガイコシのことか？ というか慌てすぎて人の名前まで間違えるな。私の名前はエルピーナだ。すまんが私もガイコシの本名は知らん」

剣をふるっていつもの鍛錬をしていたエルフィーナ。一見何も変わらないかのように見えるエルフィーナだったが、やはりエルフィーナもいつもと何かが違う。名前も自分の教えられたものとは違うと思うのが。

「くっ……まだだ！！水玉はどこだ！！」

彼女の呼びかけに暗闇からふにやりとした物体が飛び出してくる。それは彼女の探していた目的。スライムであった。

「おお、水玉。お前は……」

いつものようにすぐに出てきた水玉に安心したのか幾分落ち着いた彼女であったがスライムの姿を見て絶句する。

透明のスライムの体が何やら白く濁っているのだ。彼女が言葉を失っている間にスライムは彼女の手から飛び降りると、びよこんびよこんと奇妙な動きで飛び跳ねていった。

「そ……そんな、だ、だれか」

彼女はその場にへなへなとへたり込んでしまう。似ているようで微妙に違う。ここは彼女の知らない世界。何も知らない世界に突然放り投げられた気分だ。

そんな時間きなれた声が彼女の耳に届いた。

「何してるんだ？お前は……」

「……く、クロか！！」

勢いよく振り返ればそこには自分の良く知る魔物の姿があった。クロを見たたんそれまでの不安な気持ちは消え去って、彼女はほっと胸をなでおろす。なんだかそれまでのことが急に馬鹿らしくなった彼女は手を伸ばしてクロの頭にそっと触れ、ゆっくりとなでた。

「……………何を言ってるんだマヲウ?」

「……………え?」

ここは、ロシア大陸の北。間尾浮国^{まおひうこく}。
異形の魔物達の住まう愛と平和の国。今日も間尾浮国はにぎやかな声があふれています。

没役魔王

魔王「ふむ……今年も残り僅かになってきたな」

クロ「って言っても……まだ二週間近くもあるし、クリスマスも大晦日も紅白も残ってるぞ？」

魔王「そうだな。楽しみはまだまだあるが、ここで一つ今年を振り返ってみるとしよう」

クロ「え〜……めんどくせえ」

魔王「まず、没ネタキャラの紹介をしようと思うぞ」

クロ「没ネタキャラ？そんなもんいるのか？」

少女A「魔王様〜。没ネタキャラなんてひどいですよお」

クロ「誰だこの小娘……」

少女A「私、エルフの少女で魔王様に救われて旅仲間になるっていう設定があつたんです。『魔王国を建国しよう』の耳長族の話が作られるまでは登場確実だったのにお馬鹿作者さんが勝手に脳内でお話を変えちゃったから私の出番が無くなっちゃたの。うえ〜ん……魔王様あ〜」

魔王「ふむ、なでてやるからもう泣くな」

少女A「えへへへ魔王様の手であ〜」

クロ「随分とお前に懐いてるんだな。……こいつがお前の側近でも問題なかったんじゃないか？」

魔王「いや、残念ながら問題があったのだ」

クロ「……一体なんだ？何が問題なんだ？」

魔王「一番大きな理由が、私の家臣になったところでたいして役に立たないということだ」

少女A「グサツ!!」

クロ「ズバツといったな……あ……何か白くなっちゃったぞ、この娘。お〜い」

魔王「しかたあるまい。私に力がないのに私以外に力のない物が増えても收拾がつかんだろ。ま、私は頭の回転が速いとか統率力があるとかいう設定があるようだが……この娘は本当に魔王が好きというだけだから唯の足手まといだ」

クロ「確かに、お前は力は無いけど、頭は回るからな。でも……偶にボケたことやるよな〜捕まったり、敵に正体ばらしたり、死にそうになったり……」

魔王「ふん、偶になら逆に高評価だろうが」

クロ「誰からの評価が!？」

魔王「さて、そんな話は置いてだ……」

クロ「置いてくなよ!！」

魔王「次はちゃんと名前まで決まっている没キャラだぞ。なかなか強そうだな」

ベヒゴン「グギャー!！」

クロ「うわ!！気持ち悪っ!！」

ベヒゴン「グギャーグギャー!！」

魔王「ふむ、見た目は、巨大なナメクジの飛び出ている目玉がない形に、牙の生えた口がついてて、一見極太のぬめぬめした、目のない蛇といったところか」

クロ「説明されると余計気持ち悪いぞ!！こいつ没になってくれて助かったよ……俺こんな怪物と旅したくねえよ……」

ベヒゴン「グギャー!！グギャグギャー!！」

魔王「ふむ、こいつは人間も魔物も見境なく喰うようだ。ならばなぜ私に従うのか……理由はどうするつもりだったんだろうな?？」

クロ「え?その理由が思いつかなかったから没になったんじゃないのか?？」

魔王「残念だがそれは違う。水玉という新キャラがこいつの代わりだ」

クロ「ふーん。スライムの方が万倍マシだな……」

魔王「さて……次に進もうか」

クロ「……こいつどうすんだよ……」

ベヒゴン「グギャー！！！」

魔王「ん、無視だ」

クロ「いやいや……それ無理じゃないか？」

魔王「ん、では次のキャラはだな……」

クロ「無視か……」

魔王「お、次は人間だな」

クロ「それもお前の家臣か？」

魔王「違うな、どうやら魔王を死ぬほど憎んでいるらしい。少しエルフィーナに似ているな……」

クロ「へえ……ってあれ？そいつはどこにいるんだ？」

魔王「呼ぶほどのキャラじゃないから紹介だけだ。それにこの設定

見るからに面倒だぞ」

クロ「……んだな」

魔王「では次のコーナーに移るぞ」

クロ「コーナーって……」

魔王「今度は没になった話の流れだ。まずはそうだな……私が国の王に会うという流れが面白そうだな」

クロ「何それ？……どこの王に会うんだよ」

魔王「エンジニア王国の国王と会って一悶着っという話の流れもあったらしい。ま、さすがに国王との対面は早すぎると言うことにならなかったがな」

クロ「ホントにな」

魔王「あとは……トリヲトシ草を食べて、仮死状態になった時。本来ならば私はトリヲトシ草を吐きだして、そのあと私の看病を貴様らがするゝ的な話だったらしい」

クロ「なんでそうならなかったんだよ」

魔王「私が吐くと言う汚れた行為をするわけがないだろうが」

クロ「つまりお前のエゴで俺らはさんざん苦労させられたと？」

魔王「間抜け作者の頭に私を吐かせてはならないと言ってお告げが出たらしい。私のプライドにもこのお告げは救世主だな」

クロ「あっ……そう言えば『魔王国を建国しよう』で救世主って重要だよな。あんま触れられていないけど」

魔王「……クロ。ここは今年の反省の場であってネタばらしは感心しないな」

クロ「あゝ、わりいわりい」

魔王「全く……さて、そろそろネタも尽きてきたが……」

クロ「尽きたんなら良いじゃん。もう終わろうぜ」

魔王「おお、そうだ。お前クリスマスはサンタクロースの肉が食べたいとか言っていたな」

クロ「言ってたけど、ここで言うことではないだろ！！どんだけ俺鬼畜なんだよ……夢見る子供達とカトリック系の人から苦情がきちやうだろ！！あああああっ！！！」

魔王「ん、まあそれでだな、さすがに私はそんなに外道な真似は出来ないからクリスマスにそんなものは用意できないということ伝えようと思ったのだ」

クロ「用意できねえんなら、わざわざ言ってるじゃねーぞ、ゴリアー！！！」

魔王「ふふん、まあこんな凶暴な獣では人気も出ないだろうな」

クロ「何だと!？」

魔王「もし仮にだ……人気投票とかやったらまず確実に一位は私だろっ?」

クロ「何で言いきれんだよ……そんなのわかんねえだろうが」

魔王「大抵主人公というのは一番人気なのだ。それに私ほど魅力的なキャラもおるまい?」

クロ「……あゝそうだねえゝ（棒読み）」

魔王「じょ……冗談だ。だからそんな目で見るな」

クロ「恥ずかしいんだったら、最初っからやるんじゃねえよ。顔真っ赤だぞ」

魔王「……ん、ではこれで今回は終わりだ」

クロ「え?何この終わり……ちゅーと半端すぎないか?なあ、おいっ!ーおい!ー!」

年末魔王

魔王「ん〜なんだ？」

ガイコツ「どうやら、年末とのもので今年最後にはっちゃけましようとのことですね」

魔王「そうか、それにしても……はっちゃけるとは？」

ガイコツ「まあ、楽しくやって行きましようよ、と言っわけでも人間バージョンで行きます」

魔王「ふむ、ではクロと、エルフィーナ、それに水玉も呼ぶか？」

クロ「エルフなら酔っ払って寝てるぞ？」

魔王「酔っ払っただと？一体いつの間にアルコールなど……」

クロ「さっきまで調子よく飲んでたから、煽ってやったら酔いつぶれた」

魔王「そうか、では水玉は？」

クロ「今、エルフの看病してる」

魔王「ふむ、ではこの三人と言っわけだな」

ガイコツ「魔王様、どうしましよう……一発芸でもしましようか？」

クロ「おっ！！ いいなやれ、やれ！」

魔王「ふむ、ガイコツやってみろ」

ガイコツ「では、僭越ながら……頭蓋骨回し〜！！」

魔王「おおっ！！」

クロ「すげえな」

映像でお伝えできないのが、非常に残念です。

ガイコツ「お楽しみいただけましたか？」

クロ「ん〜なんか楽しいけど、グロい」

魔王「おいつ、年越しそばの出前でも取らないか？」

クロ「おおっ！！俺天ぷら蕎麦な〜」

ガイコツ「ワタシはとろろそばをお願い致します」

魔王「ふむ、あ……もしもし、魔王ですが……魔王城まで天ぷら蕎麦一つととろろ蕎麦一つと月見そば一つ。……はい、ではなるべく早く」

ガイコツ「いや〜それにしても本当に今年も終わりなんですな」

魔王「今年は本当に色々あった年であったな……」

クロ「おゝい、魔王コレ食べるか？」

魔王「なんだこれは？」

クロ「スルメだよ。エルフの小娘が食べてたのをかつさらってきたんだ」

魔王「ほほう、では一つもらおう」

ガイコツ「スルメは骨にいいですからねえ……」

クロ「うんうん、これで酒を飲んだらなおうまいがな」

魔王「私はまだ未成年だ。と言うかエルフイも未成年ではないか……ま、こちらの世界では成年も未成年も関係ないか」

クロ「そーいうことで、ほら酒だぞ」

魔王「おお、悪いな」

ガイコツ「まったく貴方達は」

クロ「ほらほら、ガイコツも飲め飲め」

ガイコツ「貴方もう大分酔っているようですね」

魔王「誰が酔っているだと？」

ガイコツ「魔王様……まさか一杯でそこまで酔いが回るとは……」

魔王「……ん〜……私は酔ってない……酔ってないぞ」

クロ「んじゃま、もう一杯」

魔王「ふん、悪いな」

ガイコツ「こらこら、そんなに飲んだら〜あ……もう」

魔王「ふぶん、こらガイコツ貴様も飲まんか」

クロ「そつだぞお〜貴様だけシラフは許さん」

ガイコツ「まあ、私が飲んでも酔いは回りませんけどね……飲むまねことならしてもいいですよ？」

クロ「む？ ああ！！酒がない」

魔王「ふふふ、お前たちが話している間に私が飲んでしまったよ。残念だったな」

ガイコツ「かなり急ピッチで飲んだんですね」

魔王「んん〜……もうないな」

ガイコツ「魔王様、飲んでしまわれたのですから……そんなに瓶を覗きこんでもお酒は出てきませんよ」

魔王「うつつ……もつと欲しい、もつと飲みたい。」

クロ「でもそんなに飲んだら蕎麦が食えなくな……ヒック……っちまうぞ?」

魔王「……ヤダ、イヤダ……飲みたいよう……」

ガイコツ「まったくもっ仕方ないですねえ……私がちょっと買ってきますからそれまで我慢してくださいね」

魔王「待てっ!! 行くなっ!!」

ガイコツ「……一体どっちですか……全く、分かりましたよここにいますから、そんな泣きそうな顔しないでください魔王様」

クロ「あゝ!! 骨が泣かしたゝなかしたなかしたゝ」

ガイコツ「酔っ払うと貴方達はめんどくさいということが分かりましたよ」

魔王「ガイコツゝ水ゝ水が飲みたい」

ガイコツ「はいはい、ただいま」

クロ「ほら、スルメならあるぞ? 泣くな泣くな」

魔王「そんなかたいのもういらない」

クロ「なにっ!? コレだから最近の子供はっ」

ガイコツ「魔王様、水をお持ちいたしましたよ」

魔王「ん、」

ぴんぽん

クロ「なんだ？」

魔王「きつと蕎麦だ。私がとりに行く……」

ガイコツ「お待ちください！！そんなふらふらしながらでは危ないでしょう」

魔王「うるさいっ 行くったら行くんだー!!」

ガイコツ「あゝもう、分かりましたよ。一緒に行きましょう」

クロ「いつてら〜」

……しばらくして……

クロ「お？きたか……」

ガイコツ「はあ……まさか蕎麦屋の宅配員に突っかかるとは……」

魔王「うう、気持ち悪い……」

ガイコツ「ええっ？大丈夫ですか……」

魔王「大丈夫………だ」

クロ「てんぷら〜」

ガイコツ「ちょっと、先に食べ始めないでくださいよ」

魔王「うぐっ………吐きそうだ」

ガイコツ「なんて最低な一年の閉めくりでしょうね………皆さんはこんなことにならないように………って遅いですか。………ではよいお年を、ワタシはこれからとろろそばを食べて新年を迎えることにします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6521x/>

魔王国を建国しようガイド

2011年12月31日23時53分発行